

カリキュラム・フレームワーク

学長補佐（教育課程担当）

小柳 和喜雄

現在、多くの大学では、学習環境の改善、学生の就職支援、教育方法の改善に努力している。本学はその小規模性を生かして、全学をあげて組織的に教育活動を行っていくこと（組織的教養力のアップ）に一層力を入れようと試みている。その試みの一つとして、カリキュラム・フレームワークに基づき、教育課程の編成、及び教育方法改善がある。

■カリキュラム・フレームワークとは

カリキュラム・フレームワークとは、学部や課程などにおける教育理念を実現するために、組織的にカリキュラムを構築していく基本的な枠組み、参照フレームのことだ。これを明確にすることによって、教育理念に沿ったビジョンを共有でき、各開講科目がそれぞればらばらに展開されるのではなく、互いに関わり合いながらそれぞれの役割を果たすように編成することが可能となる。

現在、本学では、学校教育教員養成課程カリキュラム・フレームワークの構築を行っている。これは、教員養成として、学生に培いたい教師に必要な知識・能力・態度などを明確にし、それを養成課程の全授業（講義、演習、実習など）でどのように実践していくかを授業担当者全員で確認していくものだ。各科目の役割を担当者だけでなく全学で確認し、組織として責任を持って、教員養成に当たることを試みている。

■なぜこれを試みるのか

なぜこのようなことを試みているのだろうか？ 理由は3つある。1つ目は、各科目で提供する内容の重なり具合を少なくし、また手薄な部分を補強するためである。教員の養成内容について、現在、教育職員免許法施行規則に必要とされる科目の領域区分は明示されているが、各科目で、どのような知識・能力・態度などを育成するかについて明記されていない。それは担当者任せられている。このため、良い意味では柔軟かつ発展的、また担当者の研究成果を反映した授業が展開されるが、逆の意味で、同じような狙いを持った授業、同じような内容を扱った授業が重ねて展開されたり、教師になる上で必要であるにもかかわらず、まったく卒業まで触れられない内容もありうるからである。2つ目は、大学で学んでいる皆さん自身が、各科目で何を学ぶのかを理解し、ゴールイメージをしっかりと持って授業に臨めるようにするためである。この講義や演習で何を学ぶのかはシラバスに示されている。しかし、そこでの学びが、教師になるためのどの部分を学んでいるのか、どんな力をつけようとしている科目なのかは、案外知られていない。そのため、ゴールイメージが持てず、ついつい自身の学びになってしまいうことも多い。それを乗り越えることが2つ目の理由だ。最後に3つ目は、入学生の皆さんや保護者の皆さん、学校や教育委員会の諸先生方、

地域の皆さんに、奈良教育大学の学校教育教員養成課程では何を学ぶのか、教師としてどのような力をつけて卒業を迎えるのかを明確に伝えるためである。これによって、そこで示した力を培うために、学内で責任を持って（結果責任）指導に当たっていることを、学外にいる皆さんに明確に示すことが可能となる（広報責任、説明責任を果たす）。

以上のような理由より、組織的な教員養成、養成結果に責任を持つ教員養成を目指すために、現在、学校教育教員養成課程カリキュラム・フレームワークの構築を行っている。

■カリキュラム・フレームワークと教師の資質能力

ところで、このカリキュラム・フレームワークを明確にしていく上で、キーとなるのは何だろうか？ それは、目標となる教師の資質能力を明確にすることである。

学生が卒業までに獲得すべき学校教員としての資質能力を、目標資質能力規準という形で示すことで、各科目担当者がその資質能力のどれを自分の担当科目で培うのか、互いに明確にできる。さらに言えば、学外の人々に、奈良教育大学の学校教員養成課程では、どのような力を持った教員を育てているのか、それを明確に説明することができる。

■ミニマムスタンダードとしての教師の資質能力の獲得とより豊かな学びの提供

しかしながら、予想できることだが、教員に求められる資質能力は多様で、複雑で多義にわたる。すべてに対して、明示することは困難で

教育課程

- 2.4 自分の専門教科について、体系的な指導の見通しが持てる（例えば、義務教育の9年間を見通した、自分の専門教科の目標・内容などのつながりが理解できている）（見通し）。
 - 2.5 教科指導、特別活動、道徳教育、「総合的な学習の時間」について、相互の関係と独自の役割を把握しつつ体系的な指導の見通しが持てる（見通し）。
 - 2.6 カリキュラムを実施していく際に、様々な人の協力が必要であること、そのためどのような取り組みが必要かわかる（見通し）。
3. 教科内容とその組織化（知識・技能・実践力・見通し・コミュニケーション力・資料活用能力、教育実践の分析・評価力）
 目標：教科専門と教科内容の関係を知り、それを授業として成立させていくための内容選択・精選といった組織の方法を知り、それらを実践として遂行できる。
- 3.1 専門とする教科のコンセプト、関連知識、スキルが何であるかを理解している（知識）。
 - 3.2 教科・領域の背景にある専門内容と教科学習に求められる知識が互いにどのような関わりになっているかを知っている（知識）。
 - 3.3 教科指導や「総合的な学習の時間」における効果的な教材開発の方法について知っている（知識）。
 - 3.4 児童・生徒が学習する上で困難な領域・知識・技能などについて知っている（知識）。
 - 3.5 「教科」指導や「総合的な学習の時間」「特別活動」「道徳」と関わって、フィールドワークなどの体験的な教育活動の組織の仕方を知っている（知識）。

図1 目標となる資質能力規準（抜粋）

教育基礎論IB	1.1	1.9	6.6	1.6	1.10	6.5
教育基礎論Ⅲ	1.1	1.6	7.6	1.9	7.1	7.10
教育基礎特講	1.2	1.9	1.10	1.1	4.2	7.3
教育基礎演習	1.9	1.10	4.4	4.2	5.5	5.6
生涯教育文化特講	1.5	1.6		6.3	7.4	7.10
生涯教育文化演習	1.5	1.9		7.5	7.6	
教育基礎論IA	1.2	1.1	1.6	1.3	1.9	1.8
教育基礎論Ⅱ	1.2	1.1	1.6	1.8	1.9	1.10
道徳研究の研究	2.2	2.4	2.5	1.2	1.1	
教育史特講	1.2	1.6	1.9	1.10		
教育史演習	1.2	1.6	1.9	1.10		
生涯教育史特講	1.5	1.3		1.9		
生涯教育史演習	1.5	1.2		1.9		
教育課程と授業	2.2	2.3	7.8	2.1	3.7	3.8
継続学習計画演習	4.2	5.3		4.6	7.5	
教育方法学特講	4.1	4.2	5.4	4.4	4.6	5.3
教育方法学演習A	2.2	2.3	4.3	5.1	6.1	7.3
特別活動の研究	3.5	3.7		4.6	7.3	
継続学習計画特講	1.5	5.1		5.3	6.3	1.5
教育方法・メディア	4.2	4.3	4.4	2.3	3.4	5.4
教育方法学演習B	1.9	4.1	4.9	5.5	7.9	7.10
教育実習事前事後指導	7.1	7.2	7.3	7.7	7.10	7.11
中等教育教育法I(情報)	3.1	3.2	2.3	2.2	3.3	3.6
教育心理学	5.3	4.7	5.1	7.1	5.2	6.2
教育心理学特講	4.4	5.5	4.3	5.4	5.5	5.2
心理学研究法	4.9	4.6	4.4	5.4	5.2	
心理学実験	4.9	4.6	4.4	5.3	5.4	

図2 各科目が責任を持つ資質能力規準（番号は図1の資質目標の数字に対応）

あり、養成課程が卒業までに責任を持てる範囲についても限られている。また一方で、大学は高等教育機関であり、学士課程修了を保証する教育内容が求められる。つまり、学校教育教員養成課程は教員養成であるとともに、専門性を持った教養人を育成していく学士課程を認定する場でもある。したがって、相当する質の高い教養教育と専門教育を充実させ、その知識、能力、態度などを卒業までに培う責任がある。そこで、本学では、教師の資質能力について方向目標というよりも到達目標をベースに、卒業までのミニマムスタンダードとして7つの目標となる資質能力規準（①教育の基礎知識、②カリキュラム設計・編成、③教科内容とその組織化、

④教育方法・技術及び学級経営、⑤児童・生徒理解及び評価方法、⑥学校と地域社会との連携、⑦職能成長）を明確にしていくことを目指した（図1）。
 これによって、奈良教育大学の学校教育教員養成課程は、教員養成として教師の資質能力の育成に明確に責任を持つとともに、大学という高等教育機関として学士の学位を学生に授与するより豊かな教養、専門性を育成する責任を果たすことができるようになった。つまり、各科目においては、教員養成としてのミニマムスタンダードの資質獲得に責任を持つ（図2）。しかし、そこに科目担当者の研究成果などを反映させた、より豊かな授業内容の提供を行うことを

より明確にすることを目指した。
 以上のように、奈良教育大学は今、手始めに学校教育教員養成課程でカリキュラム・フレームワークを明確にし、本学の学士課程での一つの教育ビジョンを明確にしようとして試みている。これをさらに総合教育課程でも明確にし、また大学院教育学研究科でも明確にしていく。これによって、大学全体として研究成果を反映させた教育責任を誰に対しても明確に説明でき、その責任を果たしていきける大学へとさらに躍進を続けようとしている。
 ますます成長を続ける奈良教育大学の教育課程をどうぞ見守っていただきたい。